

# 学と貞亮

## 自生地を遺した二人



江戸時代以来、江戸・東京近郊の名勝地として知られた荒川河畔のサクラソウ自生地は、明治時代の末には、サクラソウの掘り取りなどにより、消滅の危機に瀕していました。このような中、土合村（現在の桜区の一部）のサクラソウ自生地の保全に尽力した、二人の人物がいました。三好学と深井貞亮です。

三好学は、「官学アカデミズム」からサクラソウとその自生地の重要性に注目し、さらにその発言力を活かして天然記念物保護制度の創設を実現しました。

深井貞亮は、自生地の地元、北足立郡土合村大字田島の「名望家」の出身で、土合村政にも関わる傍ら、地域の中でサクラソウ自生地の保全と活用の活動を地道に続けていました。

対照的な経歴・立場の二人は、サクラソウ自生地の保存活動を通じて出会い、ちょうど100年前に天然記念物第1号として、国指定を実現させたのです。

サクラソウ自生地の国指定 100 年の大きな節目を迎えるにあたり、その端緒を開いた二人の熱意と尽力を振り返り、その功績を市民の皆さまにお知らせしたいと考え、この展示を開催します。

令和2年6月

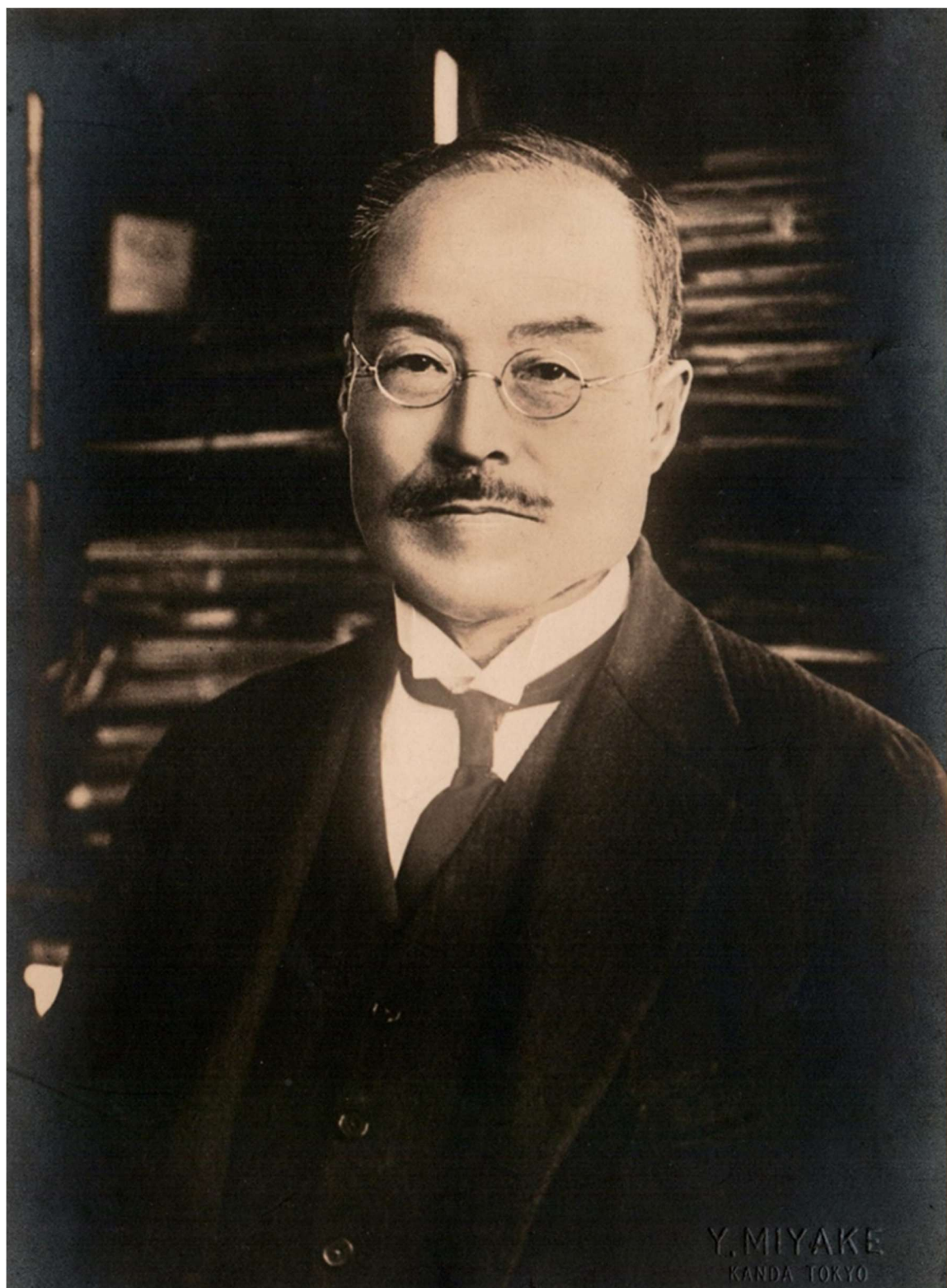
さいたま市教育員会



# 三好 学

## 植物学者・天然記念物の伝道師

三好学は、学術と国のしくみの面から田島ヶ原サクラソウ自生地の実現に功労者です。明治時代後半から大正時代にかけて、東京帝国大学理学部教授として植物学研究・教育の確立に尽くし、そのかたわら、明治時代末頃から、社会の近代化に伴う自然的景観や貴重な植物の消滅の危機を訴え、天然記念物保存制度の創設に奔走しました。



三好学肖像写真

大正年間頃／さいたま市教育委員会



# 深井貞亮

## サクラソウ自生地守護者

深井貞亮は、地域の中でサクラソウ自生地の保全に取り組む、田島ヶ原サクラソウ自生地の天然記念物指定を実現させた功労者です。20代で土合村田島地区の区長、30代には村長や村議となるなど、土合村政の要職を歴任する有力者でした。その傍ら、衰退の危機を迎えつつあった田島ヶ原の保存に取り組む、天然記念物指定が実現した後も保存と活用の第一線で活躍しました。



深井貞亮肖像画（土合村村長肖像）



# 二人の出会い

## 天然記念物指定への道

三好学は天然記念物保存の機運を高めるため、先行していた「史蹟」保存運動とも連携して、学会や政界に働きかけ、さらに一般向け雑誌や新聞にも寄稿するなどして、自然的遺産の大切さとその保存制度創設の必要性を説きました。こうした努力が実り、明治44年、国会において「史蹟名勝天然記念物保存ニ関スル建議」が可決されました。これを受け、政府は法制度の制定に向けた準備を始めるとともに、府県を通じて指定対象候補の調査に乗り出しました。

こうした動向のもと、大正元年（1912）、田島ヶ原のサクラソウ自生地が保存候補となる「名勝地」として報告され、さらに、自生地の衰退を憂慮していた深井貞亮が三好学のもとを訪ねて、田島ヶ原の自生地の存在を知らせその意義について意見交換を行いました。

三好学は、チャールズ・ダーウィンの研究などからサクラソウの繁殖や個体の特徴を早くから知っていましたが、当初、彼が取り上げていたサクラソウ自生地は、既に衰退した浮間原や戸田原でした。田島ヶ原を知った三好学は、大正5年4月、深井の案内で現地を訪れ、その重要性を確認しました。

天然記念物保存制度形成において、植物に関する制度設計と対象の選定を事実上担当したのは三好学でした。彼が深井貞亮と出会い、そして現地を訪れたこの時、田島ヶ原保存への道が一気に開けたのでした。



私は土地の名物桜草であります。  
数百年、来る春も春も  
皆様方に愛でられて参りました。ことに  
近頃皆様方の中には、私どもをお宅まで  
お連れくださる方さえ大分ございますが、  
御鍾愛のあまりとは申せ、これではあまりに  
恐れ多く、かえって心苦しうございます。  
野育ちの私どもは立派なお庭に移されて、  
いたづらに虚栄にあこがれるよりは、やはり  
先祖の土地にとどまり、美しい鳥の声や  
勇ましい皆様方の唱歌を聴きつつ、  
胡蝶と楽しく暮しとう御座います。  
どうぞ皆様のおやさしい御同情によって  
ひとしおの繁栄と幸福とを得られますならば、  
此の上もない悦びであります。

手にとるな やはり野におけ 桜草

大正丙辰弥生の月

桜草の精に代りて 土合保勝会



## 『国民新聞』大正5年4月11号

1916年／『浦和市史 第四巻 近代史料編Ⅱ』

※旧仮名遣いを現行に改めました。また、漢字を適宜平仮名に改め、句読点を補いました。背景はイメージ画像です。

深井貞亮が土合保勝会の名で自生地を保全を訴えた新聞記事です。サクラソウの精に仮託して、摘み取り、掘り取りをしないよう、訴えています。当時の危機が、愛玩のための破壊であったことがわかります。危機を憂えながらも、声高に破壊を指弾し、あるいは生真面目に「保護」を訴えるのではない、こうした柔らかな着想は、深井貞亮の人柄をうかがわせます。